

国際フォーラム

地域文化の 再発見

— 大学・博物館の視点から

開催日：2017年10月21日（土）、22日（日）

会場：別府大学 メディア教育・研究センター 4階
メディアホール

主催：人間文化研究機構基幹研究プロジェクト
国立民族学博物館

共催：台湾文化部
国立台北芸術大学博物館研究所
別府大学

[開催趣旨]

社会のグローバル化や災害からの復興のなかで生じる地域社会の変貌は、地域で連綿と築かれてきた文化の破壊を生み出し、新旧の住民の間にさまざまな摩擦を引き起こしている。一方、これらの問題の解決策として、地域住民と大学や博物館の研究者が共同して、地域文化を再発見し、保存や活用を実践する活動が試みられるようになった。そして、これらの動向は、新たな地域文化を創生し、豊かな地域社会を育てていく可能性をもったものとして、注目されてきている。特に東日本大震災以降、地域文化に焦点を当てた地域復興の実践事例は、豊かな地域創生に大きな広がりを持たせる可能性があるとして、人間文化研究においても大きな研究課題となっている。

そこで、本フォーラムでは、大学・博物館の視点から、災害からの地域文化の学び、知の拠点施設が地域文化に果たす役割、地域文化と市民をつなぐ大学・博物館の役割、大学教育からの地域文化の再発見という4つの視点と次世代の研究者である大学生、大学院生の実践活動から、地域文化の再発見に果たす人文学の役割の可能性について明らかにする。

[舉辦宗旨]

由社會的全球化與災害的復興中產生地區社會的變貌，破壞了地方上長期來連綿不絕形成的文化，並在新舊居民間引起各種摩擦。另一方面，因應這些問題的解決措施，地方居民與大學及博物館的研究者共同重新發現地方文化，嘗試實踐保存與活用的活動。於是這些動向，因有創造新的地區文化和孕育豐富的地區社會可能性，而漸受關注。尤其在東日本大地震之後，聚焦在地方文化的地區重建實例，具有豐富地方創生廣度的可能性，已成為人類文化研究的重要研究課題。

緣此，在本論壇中，我們將從大學、博物館的觀點，由災害中學習地方文化、知識的據點設施在地區文化的角色、連結地區文化與居民的大學與博物館之功能、從大學教育重新發現地區文化這四個觀點，以及新世代研究者的大學生、研究生的實踐活動中，闡明人文學科在重新發現地區文化發揮作用的可能性。

《プログラム》

総合司会 寺村 裕史 (国立民族学博物館 助教)

2017年10月21日(土)

- 10:00-10:05 主催者挨拶 吉田 憲司 (国立民族学博物館 館長)
- 10:05-10:10 共催者挨拶 佐藤 瑠威 (別府大学 学長)
- 10:10-10:15 趣旨解説 日高 真吾 (国立民族学博物館 准教授)

基調講演

- 10:15-11:45 国東半島における世界農業遺産の取り組みと大学 飯沼 賢司 (別府大学 教授)

第1部：災害の経験から学ぶ博物館活動

- 13:00-13:25 水俣病の経験を伝える博物館活動—手作り資料館のすすめ
平井 京之介 (国立民族学博物館 教授)
- 13:25-13:50 民間所在の被災資料から地域文化を読み解く
葉山 茂 (人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター 研究員)
- 13:50-14:40 刺繍の復興から探る帰郷への道—小林村の再建過程における博物館の役割
胡 家瑜 (国立台湾大学 前教授)
- 14:40-15:00 討論 (コーディネーター 日高 真吾)

第2部：大学・博物館から地域文化を考える

- 15:15-15:40 地域の文化財保護における大学の役割—複合的な文化財情報の構築と活用のために—
渡辺 智恵美 (別府大学 教授)
- 15:40-16:05 歴史文化資料保全ネットワーク事業から考える地域文化研究
天野 真志 (国立歴史民俗博物館 特任准教授)
- 16:05-16:55 博物館による歴史学と地方史の再発見—国立台湾歴史博物館を事例として
謝 仕淵 (国立台湾歴史博物館 研究員)
- 16:55-17:15 討論 (コーディネーター 川村 清志 (国立歴史民俗博物館 准教授))

.....

《議程》

総合司会 寺村 裕史 (国立民族学博物館 助教)

2017年10月21日(土)

- 10:00-10:05 主催者挨拶 吉田 憲司 (国立民族学博物館 館長)
- 10:05-10:10 共催者挨拶 佐藤 瑠威 (別府大学 学長)
- 10:10-10:15 趣旨解説 日高 真吾 (国立民族学博物館 准教授)

主題演講

- 10:15-11:45 国東半島之世界農業遺産推動活動與大學 飯沼 賢司 (別府大学 教授)

第1場次：由災害經驗學習的博物館活動

- 13:00-13:25 傳遞水俣病經驗的博物館活動—手製資料館的推薦
平井 京之介 (国立民族学博物館 教授)
- 13:25-13:50 從受害地的民間資料來解讀地區文化
葉山 茂 (人間文化研究機構総合人間文化研究推進中心 研究員)
- 13:50-14:40 從刺繡復振尋找回家的路—談小林村重建過程的博物館效應
胡 家瑜 (臺灣大學人類學 兼任教授)
- 14:40-15:00 討論 (主持人 日高 真吾)

第2場次：由大學、博物館思考地方文化

- 15:15-15:40 大學在地區文化保護中的任務—複合性的文化遺產資訊的建構與活用—
渡邊 智恵美 (別府大學 教授)
- 15:40-16:05 從歷史文化資料保全網絡事業思考地區文化研究
天野 真志 (国立歴史民俗博物館 特任准教授)
- 16:05-16:55 博物館的歷史學與地方史的再發現——以國立臺灣歷史博物館為例
謝 仕淵 (国立臺灣歴史博物館 研究員)
- 16:55-17:15 討論 (主持人 川村 清志 (国立歴史民俗博物館 准教授))

2017年10月22日(日)

総合司会 寺村 裕史(国立民族学博物館 助教)

第3部：市民とともに考える地域文化

- 10:00-10:25 「市民参加型」で地域を学ぶ～その背景、課題、可能性～
加藤 謙一(金沢美術工芸大学美術工芸研究所 学芸員)
- 10:25-10:50 多世代協業を通じた地域文化の発見と継承～特別展「工芸継承」の活動から
小谷 竜介(東北歴史博物館 学芸員)
- 10:50-11:40 地域文化の再発見、地域社会の再構築－台湾の市民が主体となる文化活動の方法と意義
黄 貞燕(国立台北芸術大学博物館研究所 助教授)
- 11:40-12:00 討論(コーディネーター 武知 邦博(枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館 学芸員))

第4部：大学教育から地域文化を見つめなおす

- 13:00-13:25 竹田市宮城・城原地区における学生による民俗調査と祭礼参加 段上 達雄(別府大学 教授)
- 13:25-13:50 学生とともに行う旧真田山陸軍墓地和泉砂岩製墓石の強化処理
伊達 仁美(京都造形芸術大学 教授)
- 13:50-14:40 台湾の大学における民俗学教育と民俗調査の現状 林 承緯(国立台北芸術大学 准教授)
- 14:40-15:00 討論(コーディネーター 政岡 伸洋(東北学院大学 教授))

第5部：学生・大学院生による地域文化の再発見

- 15:15-15:30 竹田市宮城・城原地区の民俗調査報告会と現地調査 伊東 幸希(別府大学)
- 15:30-15:45 民俗調査から考える現代の農村－宮城県大崎市三本木新沼地区の場合－
遠藤 健悟(東北学院大学大学院)
- 15:45-16:00 旧真田山陸軍墓地による展示室の再構築 森 加奈子(京都造形芸術大学)
- 16:00-16:20 討論
(コーディネーター 末森 薫(関西大学国際文化財・文化研究センター ポストドクトラルフェロー))

16:20-16:30 総括 日高真吾

2017年10月22日(日)

総合司会 寺村 裕史(国立民族学博物館 助教)

第3場次：與市民共同思考地方文化

- 10:00-10:25 以「市民參與型」方式學習地域－其背景、課題、可能性－
加藤 謙一(金澤美術工藝大學美術工藝研究所 學藝員)
- 10:25-10:50 通過多世代合作的的地方文化的發現與繼承－從特別展「工藝繼承」的活動來看
小谷 竜介(東北歴史博物館 學藝員)
- 10:50-11:40 地方文化再發現、地方社會再結構：臺灣市民主體的地方文化運動的方法與意義
黃 貞燕(國立臺北藝術大學博物館研究所 助理教授)
- 11:40-12:00 討論(主持人 武知 邦博(枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館 學藝員))

第4場次：由大學教育重新認識地區文化

- 13:00-13:25 學生參與竹田市宮城・城原地區的民俗調查與參加祭典 段上 達雄(別府大学 教授)
- 13:25-13:50 與學生共同進行真田山舊陸軍墓地和泉砂岩製墓碑的強化處理
伊達 仁美(京都造形藝術大學 教授)
- 13:50-14:40 台灣大專院校課程中的民俗學教育及民俗調查現況 林 承緯(國立台北藝術大學 副教授)
- 14:40-15:00 討論(主持人 政岡 伸洋(東北学院大学 教授))

第5場次：大學生、研究生的地區文化再發現

- 15:15-15:30 竹田市宮城・城原地區的民俗調查報告會與實地調查 伊藤 幸希(別府大學)
- 15:30-15:45 由民俗調查看現代農村－宮城縣大崎市三本木新沼地區的情況
遠藤 健悟(東北学院大学大学院)
- 15:45-16:00 重建真田山舊陸軍墓地的展廳 森 加奈子(京都造形藝術大學)
- 16:00-16:20 討論(主持人 末森 薫(関西大學國際文化財・文化研究中心 PDF))
- 16:20-16:30 總括 日高真吾

基調講演 主題演講

國東半島における世界農業遺産の取り組みと大学

飯沼 賢司 (別府大学 教授)

大分県の国東半島宇佐地域は、国連大学の推薦を受け申請を行い、2013年5月29日に石川県で行われた世界農業遺産の会議において世界農業遺産 (GIAHS) に選定された。そのテーマは「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環～森の恵みしいたけの故郷～」である。世界農業遺産とは、2002年にFAO (国連食糧農業機関 本部イタリア・ローマ) が次世代に継承すべき伝統的な農法や文化習俗・生物多様性の保全を目的に設立した制度で、まだ歴史は浅い。世界遺産が人類に共有すべき顕著な普遍的価値をもつ物件のことで、移動不可能な不動産やそれに準ずるものが対象となっているのに対して、この制度では、農業のシステムの価値を評価するところに特色がある。

国東半島・宇佐地域の農業システムは、何千年もの間、険しい山々と豊潤な海の間で維持された天然資源 (ミネラル) の複雑な動的な流れを育てており、古代からの農業景観と結びついてき、この地域は、まさに農業博物館の様相を呈している。このような場所だからこそ、自然の恵みに感謝する、放生会、修正鬼会、峯入り行といった、千年を越える祭礼が続いてきた。また、このような風土は、自然を師としその法則から、自然哲学の思想を組み立てた三浦梅園のような偉大な世界的思想家を生み出した。この農業システムが評価され、世界農業遺産となった。

2013年の申請は、かなり唐突なものであったが、世界農業遺産の認定を勝ち得るにはそれなりの背景があった。1981年、日本で最初に行われた荘園村落遺跡調査が田染荘地域で行われ、その後、30年以上に亘り、この地域では、大分県立歴史博物館によってこの調査が継続された。また、大学と連携しながら、田染地区では2000年から田園空間博物館構想の事業が取り込まれ、伝統的農村景観の保全に努め、2010年8月には国の重要文化的景観に選定された。今回の基調講演では、世界農業遺産認定に至る過程で大学がどのようにかわり、現在、どのような取り組みをしているのかこの講演の主題としたい。

國東半島之世界農業遺産推動活動與大學

飯沼 賢司 (別府大學 教授)

大分縣的國東半島宇佐地區，接受國連大學的推薦提出申請，於2013年5月29日在石川縣召開的世界農業遺產的會議上被選為世界農業遺產 (GIAHS)。其主題是「連接橡樹林和水池的國東半島・宇佐的農林水產循環～森林恩惠的香菇之鄉～」(農林業複合式永續經營模式)。世界農業遺產是2002年FAO (聯合國糧食及農業組織，總部設義大利羅馬) 以下一代應該繼承傳統農耕的方法和文化習俗、確保生物多樣性為目的而設計的制度，其歷史尚淺。

世界遺產是人類應該共享顯著普遍價值之物件，針對不可能移轉的不動產與其相應的評定準則的對象中，正是因為評估農業系統的價值而有特色。

國東半島・宇佐地區的農業系統是孕育自幾千年來存續在險峻山巒和豐饒海洋的天然資源 (礦物質) 複雜的動態流動，並且與古老的農業景觀相連結，恰好呈現了農業博物館的面貌。正因是這樣的地方，為感謝自然的恩惠，因此持續著舉行放生會、修正鬼會、峰道上山修行等這類超越千年以上的祭典。另外，這樣的風土，以自然為師的法則，成就出建立自然哲學思想的三浦梅園這樣偉大的世界思想家。此農業系統獲得評價，成為世界農業遺產。

2013年的申請雖是相當突然，但贏得世界農業遺產的認定就是因為這樣的背景。1981年，最初在日本舉行的莊園村落遺跡調查是在田染莊地區進行，其後，長達30年以上，此地區由大分縣立歷史博物館持續這項調查。此外，一面保持與大學合作，田染地區從2000年開始努力於田園空間博物館構想的事業，致力於確保傳統農村景觀，2010年8月被選定為國家的重要文化景觀。此次的主題演講，想以在世界農業遺產認定的過程中，與大學有如何的關係，以及目前應採甚麼樣的推廣活動為此次演講的主題。

第 1 部：災害の経験から学ぶ博物館活動

第 1 場次：由災害経験學習的博物館活動

水俣病の経験を伝える博物館活動——手作り資料館のすすめ

平井 京之介（国立民族学博物館 教授）

二度と悲劇を繰り返さないために、災害の経験を次世代に伝えていくことは社会の重要な課題である。その際、被害の拡大を許した失敗を隠さずに伝えることがとりわけ肝要だと思われる。熊本県水俣市には、公害の原点といわれる水俣病の経験を伝える資料館として、市立の水俣病資料館の他に、水俣病被害者を支援する NPO、水俣病センター相思社（以下、相思社）が運営する水俣病歴史考証館（以下、考証館）がある。被害者に寄り添うこの資料館の展示や運営は、市立の資料館とはかなり異質なものであるだけでなく、一般的な「資料館」のイメージからも大きくはずれた独自のものである。本発表では、相思社が考証館をいかなる媒体ととらえ、どのように活用してきたかを紹介しながら、災害の経験を伝えるために博物館／資料館が果たしうる役割を考えてみたい。

相思社は、1974 年、全国から集められた寄付金により、地域で孤立する水俣病被害者を支援する団体として水俣市郊外の被害者多発地域に設立された。当初は、補償や救済を求める水俣病被害者の運動支援を中心に活動していたが、1988 年、被害者の立場から水俣病の経験を伝えることを目的として考証館を設立する。さらに 1990 年代後半には、水俣全体を「エコミュージアム」ととらえ、考証館を拠点として、水俣病に関連した場所に来館者を有料で案内する「水俣まち案内」を開始し、修学旅行の誘致を積極的に進めるようになった。現在、高校生や大学生、研究者、教員などを中心に、年間約四千人が全国から考証館を訪れる。

本発表では、発表者が自ら集めた民族誌的、歴史的データを用いて、相思社が考証館をいかに活用しているか、どのような知識を来館者に提供しているかを検討する。こうした問いを通じ、災害の経験を伝えるために資料館／博物館を活用する新しい可能性を考えてみたい。

.....

傳遞水俣病經驗的博物館活動——手製資料館的推薦

平井 京之介（国立民族學博物館 教授）

為了不重蹈悲劇，將災害的經驗傳達給下一代是社會的重要課題。在這種情況下，不隱蔽使受害擴大的失敗更為重要。在熊本縣水俣市，作為被稱為是公害的起源地來傳遞水俣病經驗的資料館，在市立水俣病資料館之外，有支援水俣病受害者的 NPO，及水俣病中心相思社（以下簡稱相思社）營運的水俣病歷史考證館（以下簡稱考證館）。貼近受害者的這個博物館的展覽與經營，不僅與市立資料館的性質差異頗大，並且也脫離一般「資料館」的印象是很獨特的。本次的發表將介紹相思社視考證館為一個甚麼樣的媒介，以及如何有效利用，並思考為了傳續災害的經驗，博物館／資料館可能發揮的角色為何。

相思社在 1974 年，由全過募集的捐款，作為支援在當地孤立的水俣病受害者的團體，設立在水俣市郊外的受害者頻發地區。最初，是以要求補償與賑濟水俣病受害者的支援運動為中心的活動，但 1988 年，成立了一個以由被害者的立場來傳達水俣病經驗為目的的考證館。進一步在 1990 年代後期，將水俣整體視為「生態博物館」，以考證館為據點，向前來參觀水俣病相關地方的訪客收費，進行「水俣街道指南」導覽，並積極宣導修學旅行。目前，以高中生、大學生、研究人員、教師等為主，每年全國約有 4 千人參觀考證館。

在本發表，發表人以自己收集的民族誌與歷史資料，探討相思社如何有效利用考證館，對訪客又提供了甚麼樣的知識。經由這樣的問題，為傳續災害的經驗，思考活用資料館／博物館這種新的可能性。

民間所在の被災資料から地域文化を読み解く

葉山 茂（人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター 研究員）

本報告は、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）が携わってきた宮城県気仙沼市の小々汐の総本家・尾形家住宅における民間所在の被災資料を保全する活動の成果をとりあげて、地域文化を読み解く試みを紹介する。歴博は2011年の東北地方太平洋沖地震後、気仙沼市教育委員会と市民の方々などの協力を得て、尾形家住宅の生活資料約2万点を保全・整理する活動をし、それらを活用した生活文化の掘り起こしと展示制作をしてきた。

小々汐総本家の尾形家は、江戸時代中期以降から昭和初期にかけて、肥料やカツオ漁のエサとしてつかうイワシの網漁を経営する網元として発展し、集落の経済的な中心を担った。尾形家は経済的な中心であることで、人の出入りが生じ、政治や文化の中心を担った。尾形家は、そうした地域の人びとの活動の記録や記憶を物質文化として蓄積してきた。いわば住宅が「地域の蔵」としての役割を果たしてきたのである。

尾形家住宅で保全した資料の内訳は、建材や生活用具などが約5千点、明治後期から平成までのはがき資料が約5千点、手紙や領収書などの資料が約1万点である。これらの資料は、個人のイエの記憶を示すとともに、一軒の住宅を中心とした集落内の社会関係や生業や日常生活における外部社会との関わり方を示すものである。

本報告では、歴博の活動を紹介するとともに、保全した資料のなかからはがき等の資料を用いて1933（昭和8）年の津波の前後における家の生活の変容を報告する。尾形家は昭和の初期から1945（昭和20）年にかけて、著しい生業の変化を経験した。昭和8年の津波をきっかけに尾形家はイワシ網漁を廃業した。イワシ網漁の廃業は、尾形家は仕事を海の仕事から次第に離れるきっかけとなり、イエは農業や山林資源の売却で生計を立てるようになる。また長男を含む男性は士官として軍隊に所属するなど、家に残る人びとの構成も変化した。こうしたダイナミックな変化を資料から読み解く。

.....

従受害地的民間資料來解讀地區文化

葉山 茂（人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター 研究員）

本報告、在介紹国立歴史民俗博物館（以下簡稱歴博）參與宮城県気仙沼市の小々汐總本家・尾形家住宅的民間所在的受害資料保全活動的成果，並嘗試解讀地區文化。歴博是在2011年的東北地方太平洋近海地震後，得到氣仙沼市教育委員會與市民們等的協助，進行了尾形家住宅的生活資料約2萬件的保全整理活動，並應用這些資料發掘生活文化與完成製作展覽。

小々汐總本家の尾形家，自江戸時代中期以後到昭和初期，以作為經營肥料和捕撈鯉魚魚餌的沙丁魚網魚業者而逐漸興起，成了村落的經濟中心。尾形家是經濟的中心，因此擔負了人的往來與政治和文化的中心。尾形家將這個地區人們的活動紀錄與記憶作為物質文化累積了起來。可以說住宅扮演了「地區收藏」的角色。

尾形家住宅保全的資料明細，建築材料與生活用具等約有5千件，從明治後期到平成為止的明信片資料約有5千件，信件與收據等資料約有1萬件。這些資料顯示了個人對家的記憶同時，也表現了以獨棟住宅作為中心的村落裡的社會關係、生計及日常生活與外部社會相關的人員。

本報告，在介紹歴博的活動同時，也使用保存資料中的明信片等資料，報告1933（昭和8）年海嘯前後家的生活變貌。尾形家在昭和初期到1945（昭和20年）年間經歷了顯著的生計變化。昭和8年的海嘯導致尾形家的沙丁魚網魚停業。沙丁魚網魚業的停業，成了尾形家逐漸離開海上工作的契機，甚至出現家族出售農業與山林資源以維持生計。此外，包括長子在內的男子作為軍官加入軍隊等，留在家裡的人們的結構也發生了變化。將由資料中解讀這種動態的變化。

刺繡の復興から探る帰郷への道－小林村の再建過程における博物館の役割

胡家瑜（国立台湾大学 前教授）

2009年8月、高雄市の楠梓仙溪の上流にある小林村は、莫拉克（モーラコット（Morakot）。2009年に発生した台風8号）の風災による土石流に遭い、数百人の村民が行方不明または死亡する大惨事となった。災害発生後、難を逃れた小林村の村民（多くが、大武壠族・平埔原住民の末裔である）は、五里埔小林、日光小林、小愛小林的三カ所の地区に設置された恒久的な住宅（永久屋）に移住することとなった。再建の過程においては、生活面や仕事面などさまざまな困難を経験し、また、心の傷の治療や社会的及び文化的な帰属意識に関する問題などにも直面した。その中で、博物館は文化資源の救出に協力したり、災害の経験や知識教育に関する展示をおこなうことができたほか、長期的な地域の活性化や文化復興の過程において、さまざまな面で役割を果たすことができた。

小林村の再建計画のひとつとして設置された「小林平埔族群博物館」は、地域住民が再建に参加したり、博物館の専門家が協力したり、あるいは民衆が対話する場を提供することに繋がった。2014年に小林博物館が開館した際におこなわれた展覧会「回家的路－小林村的故事(帰郷への道－小林村の物語)」では、服飾資料の借用展示や、刺繡資料の研究出版などを通して、博物館はさまざまな形で被災したコミュニティと互いに動かすこととなり、地域住民が主体となって刺繡工芸や文化的アイデンティティを復興することを促した。この事例は、博物館の組織が保存する物質的記憶が、どのように地域文化を復興に導く原動力となるかを示した。刺繡の復興は、小林村の大武壠族の人々の過去のルーツへと導き、また、傷ついた人々の精神をいやす過程となり、そして、将来において文化的な産業の資源をも蓄積した。

.....

從刺繡復振尋找回家的路—談小林村重建過程的博物館效應

胡家瑜（臺灣大學人類學 兼任教授）

2009年8月高雄楠梓仙溪上游的小林村，因莫拉克風災遭到土石流覆滅，造成數百人失蹤死亡的慘痛事件。事件發生後，倖免於難的小林村民（主要是大武壠族平埔原住民後裔），被遷移到五里埔小林、日光小林和小愛小林三個永久屋社區居住。安置重建的過程，不但要渡過各種生活和工作的困難，也面臨創傷療癒和歸屬認同等社會文化問題。博物館在其中除了協助搶救保存災區文化資產，展示災害經驗和知識教育之外，還可以在長期地方培力和文化復振途中發揮不同層面的作用。

以小林村重建計畫為例，設置「小林平埔族群博物館」是作為地方居民參與、博物館專業者協力、以及大眾對話的平台。藉由2014年小林博物館開館的「回家的路－小林村的故事」展示、服飾藏品返鄉借展，和刺繡藏品研究出版等過程，博物館透過不同模式與受災社區互動，也激發社區居民主動積極復振刺繡工藝和尋求文化認同。這個案例顯現博物館機構保存的物質記憶，如何可以轉化成為地方文化復振的行動力：刺繡復振是小林村大武壠族人連結過去的尋根途徑，也是創傷者心理療癒的行動過程，並且累積未來發展文創產業的可能資源。

第2部：大学・博物館から地域文化を考える

第2場次：由大学、博物館思考地方文化

地域の文化財保護における大学の役割－複合的な文化財情報の構築と活用 のために－

渡辺 智恵美（別府大学 教授）

別府大学では2016年度から、文部科学省の私立大学研究ブランディング事業助成を受けて「九州における文化遺産保存研究のための拠点形成基盤整備事業」を展開している。この事業は、別府大学が九州地域における文化財保護のための拠点となり、地域文化の継承や文化財情報の共有化を図るとともに、地域間を結びつけるためのコーディネーター的役割を担うことを目的としている。今回は、さまざまな取組みのうち、大学で実施している自然科学的調査や新たに導入した三次元計測を利用した「より高度で複合的な文化財情報の構築と活用」の可能性について報告する。

現行の文化財情報は、写真や実測図、映像などによる平面的な記録が主流である。これらは災害等により文化財の損壊や消失が発生した場合、復元するのが非常に困難である。九州では昨年、熊本地方を中心に震度7を記録する大地震が発生し、広範にわたって被害が発生した。また、今年7月にも九州北部豪雨により文化財にも大きな被害が発生した。このような不測の事態に対して、自然科学的調査や3次元計測を利用した複合的な文化財情報は、文化財の立体的形状や材質、構造、遺存状況などの情報を補完し、修復や復元に役立つ。また、大学と地方自治体との情報の共有化は、文化財情報そのものの消失にも対応でき、文化財レスキュー活動の迅速化や大学を介した広域連携にも役立つものとなる。

九州管内の自治体と連携し、大学で構築したシステムや情報を共有することで非常時に備えるとともに、日常的に相互に情報を発信・取得することで地域連携や共同研究を推進することができると考えている。また、人的資源（学生）を用いた地域文化財の調査や文化財保存のための情報提供、セミナーやシンポジウムの開催によるリカレント教育や市民への広報と啓蒙活動を行うとともに、教育機関として高度な知識と技能を有する人材の育成に取り組んでいきたい。

.....

大學在地區文化保護中的任務－複合性的文化遺產資訊的建構與活用－

渡邊 智恵美（別府大學 教授）

別府大學從2016年度開始，承接文部科學省私立大學研究品牌建立事業助成，展開「九州的文化遺產保存研究的據點形成基礎整備事業」。本事業是別府大學作為九州地區的文化遺產保護的據點，在策畫地區文化的繼承與文化遺產資訊共享的同時，亦有肩負連繫地區間協調者角色的目的。此次，各項活動中，要報告利用在大學實施的自然科學調查與引進新的三次元測量的「更先進的複合性文化遺產資訊的建構與活用」的可能性。

現行的文化遺產資訊，以照片、實測圖和影像等平面紀錄為主流。這些因災害發生的文化遺產損壞或消失情況，要復原是非常困難。九州在去年發生以熊本地區為中心的震度7級紀錄的大地震，發生了廣泛的損失。此外，今年七月，九州北部的豪雨也對文化遺產造成嚴重破壞。針對這種難以預測的情況，利用自然科學的調查或三次元測量的複合性文化遺產資訊，可對文化遺產的立體形狀、材質、構造、遺存狀況等資訊進行補充，有助於修復與復原。同時，大學與地方自治體的資訊共享，也能對文化遺產資訊的消失做出因應，對文化遺產救援活動的加速與藉助大學的廣域合作也有助益。

經由與九州管轄區域內的自治體合作，共享大學建構的系統與情報以備緊急需要，同時我們認為，也能通過日常間互相發送與獲取資訊來推行地區合作和共同研究。另外，除了採用人力資源（學生）做地區文化遺產的調查與提供保存文化遺產的資訊，以及舉辦研討會與專題研討會進行回流教育與向市民宣傳和啟蒙活動的同時，也希望以作為教育機構來致力於培育具有先進知識與技能的人才。

歴史文化資料保全ネットワーク事業から考える地域文化研究

天野 真志（国立歴史民俗博物館 特任准教授）

東日本大震災を契機として、地域の歴史文化を災害から守る取り組みが多方面で進められている。これらの取り組みは、主に大規模自然災害時の対応を想定した広域的ネットワークの構築を目指すもので、いわば地域歴史文化の災害対策といえる。毎年のように地震や水害が発生する日本列島において、災害対策は歴史文化を継承する上で不可欠な課題である。一方で地域を軸に歴史文化を継承するためには、災害時に限定せずに日常的に地域社会と関わりを持ち、地域住民と歴史文化の価値を共有していく必要があるだろう。

1995年の阪神淡路大震災以降、地域の歴史文化を災害から守るとともに、次世代への継承を目指す取り組みが全国各地で展開している。特に、古文書など地域の記録資料が民間に伝来している日本社会の状況下、「資料ネット」と総称される民間所在歴史資料の調査・保全活動を展開する取り組みが、各地で広がりつつある。「資料ネット」の取り組みは、地域歴史資料の災害対策に留まらず、地域住民と各種研究者とが地域歴史文化のあり方を検討する、大学などを拠点とした地域の歴史文化継承の一形態として注目される。

当初「資料ネット」は、歴史学研究者を中心に進められていたが、近年では地域に伝わる多様な歴史文化に対応するために、特定の分野に留まらない活動が模索され始めている。さらに、2017年度より「資料ネット」活動と連携して地域社会の歴史文化研究と資料保存に向けた広域ネットワークを目指す、「歴史文化資料保全ネットワーク事業」が発足し、大学を拠点とした地域歴史文化の保全に向けた取り組みが進められようとしている。

以上の動向を踏まえ、本報告では、地域の多様な歴史文化の継承を目的に進展する複合的な研究分野の横断・連携状況について概観する。その上で、新たな展開のなかで派生する地域史研究の可能性について、報告者の経験を踏まえつつ展望したい。

.....

從歴史文化資料保全ネットワーク事業思考地區文化研究

天野 真志（国立歴史民俗博物館 特任准教授）

以東日本大地震為契機，保護地方歷史文化免遭災害的各項工作在各領域均有所進展。這些工作，主要是假設大規模自然災害發生時的對應，以建構廣域的網路通信為目標，可說是地方歷史文化的災害對策。在每年發生地震和洪災的日本群島，災害對策是在傳承歷史文化上的必要課題。另一方面，為了傳承該地區軸心的歷史文化，不限於災害發生時，就是平時也要與地方社會建立關係，並且須與地方居民共享歷史文化的價值吧。

1995年阪神淡路大地震之後，從災害中保護地方歷史文化的同時，為了傳承給下一代正在全國各地推展相關活動。特別是日本社會的古文書等地區的紀錄資料流傳於民間的情況下，展開對統稱「資料庫」的民間的歷史資料調查與保活動，在各地持續擴展著。「資料庫」的工作，不限於地方歷史資料的災害對策而已，也檢討了地方居民與各項目研究人員的地方歷史文化的情形，以大學等為據點來傳承地區的歷史文化的這一型態，受到了關注。

最初「資料庫」主要以歷史研究者來進行，但近年為了因應流傳地區各種歷史文化，開始不限於特定領域活動的摸索。並且，從2017年度開始，以「資料庫」活動做基礎，針對地區社會的歷史文化研究與資料保存的廣域網路為目標，開始「歷史文化資料保全網絡事業」，將朝向以大學為據點努力推進保護地方歷史文化的工作。

根據上述的動向，本報告概觀以地方的各種歷史文化傳續為目的而發展的各類研究領域間的跨部門合作情形。並且，希望由報告者的經驗展望在新的發展中延伸地區史研究的可能性。

博物館による歴史学と地方史の再発見—国立台湾歴史博物館を事例として

謝 仕淵（国立台湾歴史博物館 研究員）

博物館による歴史学には、二つの側面がある。第一に、慣習的に文献史料を利用する歴史学と異なり、博物館は多種多様な資料を有しており、私たちに有形物や画像、音声などさまざまな材料を提供し、地域文化を再発見する助けとなる。その中には、公共の歴史的な概念が投影されており、地域文化の再発見の重要な鍵となる。

第二に、博物館による歴史学は、歴史書を記述する権利の問題を重要視しており、さまざまな関係者を巻き込み、歴史を記述する過程における彼らの役割に影響を及ぼす。

従って、博物館による歴史学が地域の歴史を再発見する手助けとなるように、私たちはある種の公共性のある歴史認識を持ちつつ、記述能力を養い、共同執筆の精神を備えて、地域の歴史の記述方法を発展させなければならない。また、地域の歴史を構成する要素の検証や、その基礎研究の方法を再検討しなければならない。筆者はいくつかの例を示しながら、これらの課題を説明する。

同時に、私たちは、台湾で地域文化を発見するには、構造的な課題があることを明らかにする必要がある。私たちは、文化支配的な性質を持つ国家の歴史の押し付けや、文化行政の及ぼす影響、地域文化を想像するといった文化の統治問題に至るまで、さまざまな挑戦に直面している。

.....

博物館的歴史學與地方史的再發現——以國立臺灣歷史博物館為例

謝 仕淵（國立臺灣歷史博物館 研究員）

博物館歴史學包含了兩種面向。一、有別於歷史學慣常面對的文獻史料，博物館收藏類型的多元性，使得我們得以利用物件、圖像、聲音甚至更多不同材料，助於地方文化的再發現，這其中公眾歷史概念的投射，是其中關鍵。二、博物館歴史學關注歷史書寫權問題，這牽涉了不同的行動者，在歷史書寫過程中所扮演的角色。

因此，我們必須發展一種具有公眾歷史意識、培力功能與共筆精神的地方史書寫模式，重新檢視構成地方史的素材，及其基本研究方法，博物館歴史學才能有助於地方史的再發現。筆者將以幾個例子，說明以上的問題。

同時，我們也要釐清在臺灣發現地方文化，有其架構性的困難，從具有文化霸權性質的國家歷史之強加，乃至受到文化行政的影響，如何想像地方文化等文化治理問題，都是眼前存在的挑戰。

第3部：市民とともに考える地域文化

第3場次：與市民共同思考地方文化

「市民参加型」で地域を学ぶ～その背景、課題、可能性～

加藤 謙一（金沢美術工芸大学美術工芸研究所 学芸員）

本報告では「市民参加型」という言葉を、「利用者が能動的に博物館資源と関わりを持ち、それを使いこなそうとする意欲に基づき展開される諸活動」と捉えたうえで、報告者がかつて勤務していた長崎歴史文化博物館（以下「歴史博」と記す）における実践事例を紹介し、そこから浮かび上がってきた可能性や課題を考えてみる。

歴史博では博物館利用に積極的な学校教師、博物館ボランティアと連携しながら小学校高学年向けの郷土学習や歴史学習を実践してきた。その特徴は、長崎について博物館展示をボランティアの案内を通じて学んだ上で、その内容に対応する現地を訪ねる点にある。子どもたちは博物館で得た情報や知識を現地の景観と具体的に結びつけ、想像を働かせながら地域の歴史と文化への理解を深めるのである。

このプログラムが生まれた背景には、そこに関わった3者（教師、博物館の担当者、ボランティア）それぞれの思いがあった。教師には、子どもたちの多くが長崎の歴史や文化に対する知識や実際に史跡等を訪れた経験がないことに対する危機感があった。特に平成の大合併以後に長崎市に組み込まれた地区ではそれが顕著であった。また博物館担当者は、展示室（過去）だけで完結させず、市内に豊富にある歴史的景観（現在）を結びつける歴史学習を模索していた。ボランティアは若い世代に長崎の魅力を伝えることを生きがいとして博物館で活動していた。子どもたちの学習の成果物からは、博物館の展示から得た情報を現地の史跡見学に結びつけて編集し発信する力が認められるなど、教師からは子どもたちが地域の歴史と文化を発見する機会になったとする評価が得られている。

一方で異なる立場から「市民参加」するもの同士が一つの目標を目指す過程で生じる困難にも直面した。これらを解決し、次のステップへ進める環境を作ることが博物館の担当者の役割となった。「市民参加型」博物館には、意欲ある市民を見出し、寄り添い、相互に結びつけるコーディネーターが必要不可欠である。

以『市民參與型』方式學習地域—其背景、課題、可能性—

加藤 謙一（金澤美術工藝大學美術工藝研究所 學藝員）

本報告中、「市民參與型」一詞被視為「使用者積極與博物館資源保持聯繫，並有意願熟練運用於發展各種活動」，發表者將介紹過去服務單位的長崎歷史文化博物館（以下簡稱「歷史博」）之實際案例，並思考從中浮現出的可能性與課題。

在歷史博中，與積極參與博物館的學校教師和博物館志工合作，實踐了小學高年級學生的鄉土學習與歷史學習。其特色是通過志工介紹博物館展覽學習了有關長崎的歷史，並因應內容進行實地參訪。學生們具體地將在博物館獲得的資訊與知識和當地景觀連結起來，並運用想像力加深對地方歷史與文化的理解。產生這個計畫的背景，來自與此相關三方（教師、博物館員、志工）的各自想法。對老師來說，感到多數學生對長崎的歷史與文化的知識，以及沒有實際訪問歷史遺跡經驗的危機感。特別是在平成大合併後被整編入長崎市的地區特別明顯。此外，博物館員認為只在展覽室（過去）是不能完成的，嘗試了摸索連結市內豐富歷史景觀（現在）的歷史學習。志工在博物館活動以向年輕世代傳達長崎的魅力一事作為生活的意義。從學生的學習成果來看，由博物館的展覽獲得的資訊與實地史跡參訪連結起來編輯、傳達的能力獲得認同，而教師方面因學生們有了發現地方歷史與文化的機會而獲得評價。

另一方面，也須面對由不同立場從事「市民參與」的夥伴要朝向同一目標的過程中所產生的困難。為了建立一個解決這些問題的環境，以繼續下一階段，這是博物館員的責任。在「市民參與型」博物館中，選出有積極熱情的市民，並貼近他們，做相互之間聯繫的協調人員是不可或缺的。

多世代協業を通じた地域文化の発見と継承～特別展「工芸継承」の活動から

小谷 竜介（東北歴史博物館 学芸員）

1928年、国立のデザイン研究機関である工芸指導所が、東北日本の地方都市仙台に設置された。デザイン開発を通して、当時産業化が遅れていた東北の工芸品の産業化を出発に、日本全体の工芸の産業化を図るためである。全国から気鋭の若手デザイナー、工芸技術の研究者が採用され活動を行った工芸指導所は、日本の工芸の近代化に大きな足跡を残した。その本所が置かれた仙台でも、当時を知る職人などからは直接、間接の影響を受けた話を聞くことができ、またその足跡が仙台各地に残っている。しかしながら、国立の研究機関という敷居の高さもあり、仙台では職人など一部を除きその存在はほとんど知られていなかった。

東北歴史博物館ではこの工芸指導所が製作した試作品ほか関係資料一式が移管されことから、工芸指導所の活動を紹介する特別展を計画した。その企画過程で、この展示をより多くの世代、特に歴史博物館の利用が少ない10代から20代に興味関心を高めたいと考え、仙台・宮城の高校生、大学生、そして若手職人とともに展示のためのワークショップを開催した。ワークショップでは工芸指導所の活動を振り返り、試作品からインスピレーションを得たものづくりに職人とともに取り組んだ。そして、そのものづくり、思考過程を展示に反映させることで、他世代間、そして学生、職人、学芸員といった立場を超えた展覧会を制作した。それは、工芸指導所のコンセプトを再発見し、次代に継承していく活動にも位置づけられるものとなった。

この報告では、ワークショップの活動と、その成果として実施した特別展「工芸継承」の概要を報告し、他世代協業を実施することで、地域の歴史文化の再発見をする意義を考えたい。

.....

通過多世代合作的な地方文化の発見と継承—從特別展「工藝繼承」的活動來看

小谷 竜介（東北歴史博物館 學藝員）

1928年、國立設計研究機關的工藝指導所設置在日本東北的地方都市仙台。通過設計研發，從當時產業化遲緩的東北工藝產業化開始，追求日本整體的工藝產業化。採用了全國各地活躍的年輕設計師、工藝技術研究者進行活動的工藝指導所，對日本工藝現代化留下了偉大的事蹟。就是在本所設立的仙台，也是可以從瞭解當時情形的工匠等人那邊聽到直接、間接受到影響的事，其功績仍留傳在仙台各地。然而，國立研究機關這樣的門檻高，在仙台除了部分工匠外，大家幾乎不知道它的存在。

東北歷史博物館因為工藝指導所移交了試作品及一批文件，故策畫了一個介紹工藝指導所活動的特別展。在策畫過程中，考慮到希望這個展覽能讓更多的世代，特別是提升較少利用歷史博物館的10多歲到20歲的青少年的興趣與關心，因此為仙台・宮城的高中生、大學生、年輕工匠舉辦了一個這個展覽的工作坊。在工作坊，回顧了工藝指導所的活動，同時與工匠一同合作，從試作品中取得創作靈感。該合作將思考過程反映在展覽中，從而實現了超越了不同世代、學生、工匠、學藝員等不同立場的展覽會。那是重新發現了工藝指導所的概念，並也對繼承下一代的活動賦予了定位。

本報告，在報告工作坊的活動與作為其成果而實施的特別展「工藝繼承」的概要，並因為施實施了不同世代的合作，希望能思考地方歷史文化再發現的意義。

地域文化の再発見、地域社会の再構築 —台湾の市民が主体となる文化活動の方法と意義

黄 貞燕 (国立台北芸術大学博物館研究所 助教授)

戒厳令が解かれた後の台湾では、新たな国家民族主義の国家政策のもと、民間が主体となって歴史を記すことが奨励され、現在に至るまで、国家の文化政策の重要な指針となっている。政策が推進され、資源が投入される中で、民間の文化・歴史を扱う団体が多く生まれ、80年代以降の台湾における重要な文化現象となった。行政と民間の目標は一致しているように見えるが、立場や価値観、方法はそれぞれで異なる。長年にわたって、両者が対立や摩擦を経てきた過程は、台湾の現代社会的な意義における地域の歴史を模索する上で、極めて重要である。

本文では、高雄市に設立された個人の民間団体である「打狗文史再興会社」を取り上げ、政策とは関係のない、市民主体の地域文化活動の特色と意義に注目する。打狗文史再興会社は、都市計画によって失われる古い家屋を救うことを契機に設立され、地域の歴史を調べることの意欲を掻き立て、生活の価値観に対する理想を改めることを促してきた。また、将来的には一連の創造的な文化活動を展開し、地域文化史の発見・保存と、都市の発展との間に新たな調和をつくり出すことを目指している。

国家政策の観点から捉えた場合、高雄市の打狗文史再興会社の活動は、文化資源の保護における典型的な例とは言えず、また、厳密で体系立てた緻密な計画を伴わず、効率的なものではない。壊れかけた古い家屋の修復や保護をおこなうためには、古い家屋を修復する伝統的な技術にはじまり、都市の考古学や地域の文化や歴史の概略、社会的弱者の救済に至るまで、総合的に学ぶ必要がある。打狗文史再興会社の核心は、古い家屋自体ではなく、古い家屋を護る活動によって、いかに地域の歴史や文化、環境を考えるきっかけをつくり、また、新しい社会のネットワークや価値観、新たな記憶を構築するかである。

.....

地方文化再発見、地方社会再結構： 臺灣市民主體的地方文化運動的方法與意義

黄 貞燕 (國立臺北藝術大學博物館研究所 助理教授)

解嚴後的臺灣，在新國族主義的國家大旗之下，鼓勵以民間為主體的地方歷史書寫，成為國家文化政策重要方向持續至今。在政策推動與資源投入之下，民間文史團體的勃興，是臺灣 80 年代以降的重要文化現象。然而，看似目標一致的行政與民間，其實各有立場、價值觀與方法，長年來彼此對抗、磨合的過程，對摸索地方歷史在臺灣當代社會的意義，至為重要。

本文以高雄市打狗文史再興會社這個民間團體為例，關注這類非政策帶動、由市民主體發起的地方文化運動之特色與意義。打狗文史再興會社的設立，以搶救因都市計畫而面臨拆除的老屋為契機，喚起了探索地方歷史的意欲，與重構生活價值觀的理想，日後展開一連串富有創意的文化行動，以期在地方文史發現與保存、以及城市發展之間，創造新的平衡。

高雄市打狗文史再興會社的行動，從國家政策面向來看，是一種非典型的文化資產守護，沒有嚴謹而結構性的計畫、不求效率。為了修復、守護頹敝老屋，從共同學習修復老屋所需的傳統木構技術出發，擴及城市考古、社區文史導覽、甚至社會弱勢照護。會社的核心關懷不在老屋本身，而在守護老屋的行動，如何成為成為思考地方歷史、文化與環境的契機，並建構新社會網絡、價值觀與新的在地記憶。

第4部：大学教育から地域文化を見つめなおす

第4場次：由大學教育重新認識地區文化

竹田市宮城・城原地区における学生による民俗調査と祭礼参加

段上 達雄（別府大学 教授）

1950年代から始まる戦後の生活改善運動と、1960年代の高度成長期と燃料革命によって、それまでの伝統的生業と生活は大きく変貌することとなった。そのような変化の中にあっても、今までは話者の記憶を頼って民俗誌作成を行ってきた。しかし、話者の多くが戦中・戦後世代になりつつある。民俗誌の作成も最終期に入らる中で、どのように民俗誌調査を行うか、工夫が必要になる。民俗学研究室の学生たちと話し合いながら、昭和30年前後の話を中心に聞くことができるのではないかと考えた。

2011年、竹田市・大学連携センターが開設され、大学生たちが宿泊して活動できるようになった。センターは竹田市埋蔵文化財センター（旧双城中学校）に隣接して建てられている。ここを利用した民俗調査の実施を竹田市教育委員会に打診したら、調査では、聞き取り調査の会場の準備と話者の手配をしてもらえることになった。

2012年は、双城地区（城原と宮城）全域を巡視した。2013～2014年は聞き取り調査。2015年は報告書の原稿作成を行った。2016年は現地報告会を開催する予定だったが、諸事情によりできなかった。2017年6月3日に埋蔵文化財センターで学生たちが報告会を行い、40人近くの地元の人たちが参加してくれた。双城地区の人たちは、調査などのたびに懇親会を開いてくれ、友好を深めることができた。

環境歴史学・文化遺産学実習Ⅱ（民俗学調査法）は、民具の実測と写真撮影を含む民俗学の現地調査法を学ぶ授業である。この授業では2012年から、城原八幡社の秋季大祭の行列の神輿を担いだり、太鼓を運んだりすると共に、獅子舞などの民俗芸能を見学し、地元の人たちと一緒に昼弁当を食べる。前日の夜には城原夜神楽を鑑賞する。この現地見学での課題は、祭礼や民俗芸能が地域にとってどのような意味があるかを考えてレポートにまとめることである。

.....

學生參與竹田市宮城・城原地區的民俗調查與參加祭典

段上 達雄（別府大學 教授）

因1950年代開始的戰後生活改善運動與1960年代的高度成長期與燃料革命，使傳統生業與生活有了很大的變貌。即便在這樣的變化中，至今仍依靠口述者的記憶製作民俗誌。然而許多口述者正進入戰中、戰後世代。民俗誌的製作也進入最後時期，因此如何進行民俗誌調查，必須好好設計。一面與民俗學研究室的學生們討論，一面思考應該能以昭和30年前後的口述為中心。

2011年，竹田市・大學合作中心成立，大學生們得以住宿活動。中心與竹田市埋藏文化財中心（舊雙城中學校）毗鄰建造。向利用這裡實施民俗調查的竹田市教育委員會詢問，於是在調查上，得到訪談調查會場的準備與口述者的安排。

2012年巡視了雙城地區（城原與宮城）整個地區。2013年到2014年做訪談調查。2015年完成報告書的原稿。2016年預定在當地舉行報告會，但因各種原因而無法舉辦。2017年6月3日在埋藏文化財中心學生們舉行了報告會，有近40名當地人參加。雙城地區的人們，因每次的調查與懇親會，增進了彼此間的友誼。

環境史研究・文化遺產學實習Ⅱ（民俗學研究方法），是學習包含了實測生活用具與攝影的民俗學現地調查法的課程。此課程從2012年開始，隨著城原八幡社秋季大祭的隊伍抬神轎，搬運大鼓，參觀了舞獅等民俗技藝，並與當地人一同吃著午餐便當。在前一天晚上欣賞了城原夜神樂。此次實地參觀的課題是，祭祀與民俗技藝對地方而言意味著甚麼樣意義的整理報告書。

学生とともに行う旧真田山陸軍墓地和泉砂岩製墓石の強化処理

伊達 仁美（京都造形芸術大学 教授）

旧真田山陸軍墓地（大阪市天王寺区玉造本町）は、明治4(1871)年に当時の兵部省が設置し、昭和20(1945)年の終戦に至るまで陸軍が管理していた墓地である。戦前には日本全国に80ヶ所以上作られた陸軍墓地のなかで最も古い歴史を持っている。墓地には、西南戦争、日清、日露、2度の世界大戦にいたるまで、陸軍に所属した兵士の他、軍役夫等の一般人、中国人、ドイツ人捕虜の病死者も埋葬されている。

墓地には、5299基以上の墓石があり、その多くは和泉砂岩で作られている。それらは経年劣化により、倒壊の危機に曝されている。墓石には、亡くなられた方の氏名や経歴が刻されているが、表面の剥離や亀裂により文字の判別が難しい状態となっているものもある。これらの情報は、戦争遺跡の実物資料として、残していかなければならない。墓地の管理は「(公財)真田山陸軍墓地維持会」ならびに「NPO法人旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会」が行っている。墓石の強化処理については、「(公財)真田山陸軍墓地維持会」が中心となり、京都造形芸術大学の民俗文化財の保存修復を学ぶ学生たちが参加している。

墓地にある5299基の墓石の中、和泉砂岩製の墓石は3553基（破損墓碑塚を除く）である。維持会学芸員の永田綾奈氏により、劣化状態をA～Dの4段階に分類された。A：ほぼ良好(546点) B：亀裂程度(2195点) C：脆弱化、表面剥離、亀裂、劣化等(779点) D：劣化が著しく、専門機関による施工が必要(33点)となった。学生たちによる施工は、Bを対象とすることとした。現在Bの状態と判断したものについては、亀裂の進行が表面剥離に繋がると懸念されるため、今後さらにCの割合が多くなることが推測される。そのため、学生による簡易な施工を行うことで、Cに移行することを防ぐことができ、本活動の効果はあると考えられる。

強化処理は、石材文化財の強化処理への使用実績のある珪酸エチルエステルがベースになっているワッカー OH(旭化成ワッカーシリコン株式会社)を用いた。

.....

與學生共同進行真田山舊陸軍墓地和泉砂岩製墓碑的強化處理

伊達 仁美（京都造形藝術大學 教授）

真田山舊陸軍墓地（大阪市天王寺區玉造本町），在明治4（1871）年由當時的兵部省設立，至昭和20（1945）年終戰為止是由陸軍管理墓地。這是戰前在日本全國有80處以上的陸軍墓地中歷史最悠久的。墓地中除了從西南戰爭、甲午戰爭、日俄戰爭到兩次世界大戰間陸軍所屬的士兵外，軍役夫等普通人、中國人、德國人俘虜病死者也被埋葬在此。

墓地裡有5,299座以上的墓碑，多為和泉砂岩製作。由於經年劣化，面臨倒塌的危機。墓碑刻有死者的姓名和經歷，但由於表面剝落與龜裂使得文字的辨別成為困難的情況。這些資訊作為戰爭遺跡的實物資料，必須保留下來。墓地的管理由「(公財)真田山陸軍墓地維持會」及「NPO法人真田山舊陸軍墓地與其思考保存會」進行。墓碑的強化處理方面，以「(公財)真田山陸軍墓地維持會」為中心，和京都造形藝術大學學習民俗文化財保存修復的學生們參加。

墓地的5,299座中，和泉砂岩製的墓碑有3,553座（破損墓碑塚除外）。維持會學藝員永田綾奈將劣化狀態分為A~D四個等級。A：大致良好（546點）、B：龜裂程度（2195點）、C：脆化、表面脫落、龜裂、惡化（779點）、D：惡化顯著，有專門機關施工的必要（33點）。學生們的施工以B為對象。有關於B狀態的判斷，因擔心龜裂的發展會牽連到表面脫落，所以推測今後C的比例會增加。因此經由學生的簡易施工，可以防止轉移到C，被認為是本次活動的成效。

強化處理使用了對石材文化財強化處理已經具有成效的矽酸乙酯研發而成的瓦克 OH（瓦克旭化成有機硅有限公司，Wacker Asahikasei Silicone Co.,Ltd.）。

台湾の大学における民俗学教育と民俗調査の現状

林 承緯（国立台北芸術大学 准教授）

台湾では民俗学の学科が未だ確立しておらず、また台湾民俗学が存在しない。そのような現状において、台湾の各大学では、民俗学のどのような知識を教えるのか、また、伝統文化に関する教育をどのようにおこなうのであろうか。これらは台湾に民俗研究の学科が成立する過程を考察するにあたり、重要な課題である。一方で、大学のカリキュラムにおける民俗調査（つまり、民俗や世相を対象とする調査）はどのようにおこなわれてきたのだろうか。例えば、1970年代に阮昌銳教授が大学生を引率して緑島にて実施した民俗調査や、1990年代に余光弘研究員が人類学的手法を取り入れて鹿港および金門にて展開した調査は、重要な指標となる。近年では、この種の集団的調査は珍しくなり、さまざまな異なる調査法と教授法が取り入れられている。例えば、国立台中教育大学の林茂賢教授は、学生に対して伝統的な文化活動に積極的に参加することを求め、カリキュラムの採点基準としている。一方、筆者は離島における漁村の民俗調査の傍ら、集団的・社会コミュニティ調査を続けている。2010年に台北の有名な寺院である保安宮の力士会の信仰組織の調査をおこない、調査成果を報告した。五年後、同組織が火災にあい、神輿や祭事用具などの重要な宗教用具を焼失したが、凶らずも、その調査の成果は宗教用具の復原製作の基となった。

本発表では、まず、戦後から現在に至るまでの台湾における民俗学の教育の現状を紹介する。そして、私が開設した民俗調査のカリキュラムと被災文化財の復元に関する経験談を例として、大学教育の一環としておこなう民俗調査が、地域共生の実践に貢献する可能性について考える。

キーワード：民俗学教育、民俗調査、民俗学、地域共生、台湾

.....

台灣大專院校課程中的民俗學教育及民俗調查現況

林 承緯（國立台北藝術大學 副教授）

在民俗學學科尚未成形的台灣，在沒有一門台灣民俗學現況下，台灣各大學相關課程傳授什麼內容的民俗學知識，對傳統文化教育的教育又怎麼做，這是思索台灣民俗研究學科化歷程，相當關鍵的課題。一方面，民俗調查也就是以民俗世相為調查學習對象的大學課程又如何，譬如七零年代阮昌銳教授帶領政大學生進行綠島民俗調查、九零年代余光弘研究員採人類學調查手法展開鹿港、金門的調查教學可視為重要指標。近年來，這種集體性的調查教學日趨罕見，轉變成各種不同的民俗調查及教學作法。譬如中教大林茂賢教授要求學生積極投入傳統文化活動，以此作為修課採點依據。筆者則延續集體性的社群調查，除了到離島做漁村民俗調查，在2010年曾針對台北著名寺廟保安宮力士會完成信仰組織的調查教學，這份當年的教學成果報告，意外成為五年後該組織遭逢火災，燒毀神輿、祭器等重要宗教物件受災後，重新復原的製作依據。本發表先從台灣戰後至今的民俗學教育現況談起，接著以筆者開設的民俗調查課程與受災文物復原的經驗為例，思索作為大學教育一環的民俗調查對地域共生實踐可能的貢獻。

關鍵字：民俗學教育、民俗調查、民俗學、地域共生、台灣

第5部：学生・大学院生による地域文化の再発見

第5場次：大學生、研究生的地區文化再發現

竹田市宮城・城原地区の民俗調査報告会と現地調査

伊東 幸希（別府大学）

昨年2016年は阿蘇山の噴火の影響で、城原八幡社の神樂見学やお祭りの行列に参加できなかったが、今年6月3日には竹田市埋蔵文化財センターで民俗調査の報告会をすることができた。先輩たちの書いた箇条書きの報告をもとに、民俗報告書用の原稿を書いたので勉強になったが、調査をしたのは先輩たちで、私たちは地元のことを良く知っているわけではなかった。

報告会の後で、地元の人たちが懇親会を開いてくれた。その中で、伝説の伝承地や古い暮らしについて、現地で実際に見てみないかとの話が出てきて、夏休み中に実施することが決まった。8月22日から24日の現地調査では、地元の郷土史家の麻生徹三さんと奥様の案内で、地元の各地区の人たちの協力を得て、鬼を退治した観音様の伝説を伝える鬼森の観音堂や鬼の岩屋と松尾寺、古民家に残る五右衛門風呂やカマド、それにウマヤなどを見ることができ、城原八幡社の大祓いの行事を、茅の輪作りなどをして体験学習することができた。

.....

竹田市宮城・城原地区的民俗調査報告會與實地調查

伊東 幸希（別府大學）

去年2016年受到阿蘇山爆發的影響，無法參加城原八幡社的神樂見學與祭祀的隊伍，但今年6月3日在竹田市埋藏文化財中心完成民俗調查的報告會。以前輩們書寫的分項報告為基礎，撰寫了民俗報告書的草稿而達到學習，然而進行調查的是前輩們，我們並非很清楚當地的事。

在報告會後，當地的人們舉行了懇親會。其中，當談起有關傳說的地點與古老的生活，有人提出是否到當地實際探訪，因而決定在暑假期間進行。在8月22日至24日的實地調查中，在當地的鄉土史學家麻生徹三先生與夫人的導覽，與當地各地區人們的協助下，看到了流傳著消滅鬼怪觀音傳說的鬼森觀音堂和鬼之岩屋與松尾寺，以及仍留傳在古民家的五右衛門風呂與爐灶，還可以看到馬廄等，也進行了製作城垣八幡社的大祓祭神儀式的茅之輪等地體驗學習。

民俗調査から考える現代の農村—宮城県大崎市三本木新沼地区の場合—

遠藤 健悟（東北学院大学大学院）

東北学院大学民俗学研究室では、2008年度より宮城県大崎市三本木新沼地区をフィールドに、東北歴史博物館と共同で調査を行ってきた。その成果は、中間報告書3冊のほか、2017年度にはそれらをまとめた最終報告書を刊行する予定である。当地は宮城県内陸北部に広がる大崎耕土に位置し、総面積の80パーセントが田圃という東北地方を代表する穀倉地帯のひとつである。本調査は、これまで十分に調査・記録されてこなかった宮城県農村部の民俗全般を把握するために実施されたものであり、その調査は大学院生と学生が中心となって行なわれている。

ところで、これまでの民俗報告書をみると、東北のイメージに影響されつつ、どちらかというと古いものに注目する傾向があった。これに対して、本調査では歴史的展開も踏まえながら、現在のありのままの姿を調査・記述することに注意しながら進めてきた。

そこで、本報告ではこれまでの調査を踏まえ、現段階での成果や調査のプロセスのなかでみえてきた新沼地区の特徴を紹介しつつ、その学問的意義と課題について考えてみたい。

.....

由民俗調查看現代農村—宮城縣大崎市三本木新沼地區的情況—

遠藤 健悟（東北學院大學大學院）

東北學院大學民俗學研究室，自 2008 年度以宮城縣大崎市三本木新沼地區為範圍，與東北歷史博物館共同進行了調查。其成果除中間報告書 3 冊外，預定在 2017 年度出版整理好的最終報告書。該地是位於宮城縣內陸北部遼闊的大崎耕地，總面積 80% 為田地，是代表東北地方的糧倉地區之一。本次調查是至今仍未被充分調查、紀錄的宮城縣農村，為全面掌握民俗而實施，其調查主要以研究生與學生進行。

然而，由迄今為止的民俗報告書來看，仍受到東北形象的影響，說起來是有著關注古老東西的傾向。對此，本次調查一方面根據歷史發展的基礎，一方面也謹慎進行現狀的調查與記述。

故本報告，依據至今為止的調查結果，介紹在現階段的成果與調查的過程中看到的新沼地區的特徵，同時想思考有關這個學術的意義與課題。

旧真田山陸軍墓地による展示室の再構築

森 加奈子（京都造形芸術大学）

旧真田山陸軍墓地の展示室を、わかりやすい展示にするために再構築する活動を行った。活動前の展示室は、墓地を紹介するパネル類とともに新聞の切り抜きが壁に貼り付けられ、出版物がテーブルに置かれている状態で、解説文もなく、見学者には理解しにくい展示になっていた。本活動にあたり、私たちは、何度も見学を行い、そこから問題点を挙げ、「史実を分かり易く伝える」という事を主体に、展示内容のデザインを精査する事から始めた。

さらに展示内容については、関わっている方々に聞き取り調査と当墓地の文献を収集し読み解き、全員で勉強会を重ねた。また、史実だけではなく、旧真田山陸軍墓地にある 5100 基以上現存する墓石についてもその情報や経年劣化により損傷した状態をパネルにまとめた。現在墓石の修復や強化処理は、(公財) 真田山陸軍墓地維持会が中心となり行っており、随時その情報を更新出来るように展示方法を工夫した。

※本活動は、京都造形芸術大学保護者会「蒼山会」研究製作助成金により行った。

.....

重建真田山舊陸軍墓地的展廳

森 加奈子（京都造形藝術大學）

為使真田山舊陸軍墓地的展廳成為平易易懂的展示，而進行重新打造活動。活動前的展廳是，介紹墓地的展板之類和新聞剪報一起貼在牆上，出版品放置在桌上的情況，並且也沒有說明文字，對參觀者而言是難以理解的展覽。在此活動之際，我們多次參觀，並從中提出問題點，以「傳達易理解的史實」為核心，由仔細調查展覽內容的設計開始。

進一步在展覽內容方面，向相關人士進行訪問調查與該墓地的文獻蒐集和解讀，全體進行了多次學習會。此外，除了史實，也對真田山舊陸軍墓地裡現存 5,100 座以上的墓碑，將其資訊與受到長年劣化而損壞的狀況整理在展板上。目前墓碑的修復與強化處理，以（公財）真田山陸軍墓地維持會為中心進行，並為能隨時更新資訊而鑽研其展覽方法。

※ 本活動，由京都造形藝術大學保護者會「蒼山會」研究製作助成金進行。

《 発表者プロフィール 》

日高 真吾 国立民族学博物館人類基礎部門研究部准教授。

(財)元興寺文化財研究所研究員を経て、2002年より現職。博士(文学)。

民俗文化財の保存修復方法、博物館における資料保存に関する研究をおこなう。

主な著書、編著書に、『女乗物—その発生経緯と装飾性』(東海大学出版会 2008年)、『博物館への挑戦—何がどこまでできたのか』(三好企画 2008年 園田直子と共編)、『記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産』(千里文化財団 2012年)、『災害と文化財—ある文化財科学者の視点から』(千里文化財団 2015年)がある。



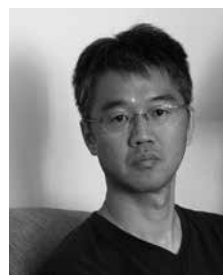
飯沼 賢司 別府大学文学部史学・文化財学科教授。

早稲田大学文学部助手大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館(現大分県立歴史博物館)主任研究員を経て、現職。早稲田大学大学院文学研究科日本史専攻博士課程後期単位取得満期退学。日本史(古代・中世)環境歴史学の研究をおこなう。主な著書、編著書に、『経筒が語る中世の世界』(思文閣出版 2008年)、監修/編著『図説 大分県の歴史シリーズ』4巻(郷土出版社 2009年)、『八幡神とはなにか』(角川書店 2004年)がある。



平井 京之介 国立民族学博物館超域フィールド科学研究部教授。

ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学研究科博士課程修了、Ph.D.(社会人類学)。花王株式会社を経て、1995年より国立民族学博物館勤務。専門は社会人類学、東南アジア研究、日本研究。主な編著書に、『Social Movements and the Production of Knowledge: Body, Practice, and Society in East Asia (Senri Ethnological Studies 91 2015年)』、『微笑みの国の工場—タイで働くということ』(臨川書店 2013年)、『実践としてのコミュニティー移動・国家・運動』(京都大学学術出版会 2012年)、『村から工場へ—東南アジア女性の近代化経験』(NTT出版 2011年)がある。



葉山 茂 人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員(国立歴史民俗博物館特任助教〔併任〕)。

総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻修了後、国立歴史民俗博物館外来研究員・同機関研究員・同特任助教を経て、2016年より現職。災害常習地における人々の生業活動・生き方に関する研究、現代における自然と人のかかわりに関する研究を行なう。おもな著書・編著書に『現代日本漁業誌—海と共に生きる人々の七十年』(昭和堂 2013年)、『東日本大震災と気仙沼の生活文化—図録と活動報告』(国立歴史民俗博物館 2013年)がある。



胡 家瑜 台湾大学人類学前教授。

博物館人類学、物質文化、台湾原住民に関する研究をおこなう。

主な著書に、『針線下的繽紛—大武壠平埔衣飾與刺繡藏品圖録』(高雄市立歴史博物館 2014年)、『文物、造型與臺灣原住民藝術：臺大人類学博物館宮川次郎藏品圖録』(国立台湾大学出版センター 2015年)がある。



渡辺 智恵美 別府大学文学部史学・文化財学科教授。

(財)元興寺文化財研究所、別府大学文学部准教授を経て、現職。

奈良大学文学部史学科卒業。文化財の保存修復、考古学の研究をおこなう。

主な著書、編著書に『保存科学入門』（分担執筆 京都造形芸術大学編 角川出版 2004年）、文化財を探る科学の眼シリーズ4『古墳・貝塚・鉄器を探る』（分担執筆 国土舎 1999年）、文化財を探る科学の眼シリーズ3『青銅鏡・銅鐸・創建を探る』（分担執筆 国土舎 1996年）、『荒神谷遺跡と青銅器』（分担執筆 島根県古代文化センター編 同朋舎出版 1995年）がある。



天野 真志 国立歴史民俗博物館特任准教授。

東北大学災害科学国際研究所助教を経て、2017年より現職。博士（文学）。

紙媒体歴史資料を中心に、各地に伝来する歴史資料の保存や継承に関する研究をおこなう。主な著書、編著書に、『記憶が歴史資料になるとき』（蕃山房、2016年）、『東北文化資料叢書8 平元貞治『献芹録』』（東北大学東北文化研究室、2015年）がある。



謝 仕淵 国立台湾歴史博物館研究員、副館長。

パブリック・ヒストリー、物質文化、スポーツの文化史に関する研究をおこなう。

主な著書に、『「國球」誕生前記：日治時期臺灣棒球史』（国立台湾歴史博物館 2013年）、『「今後凡有勤務者 須帶徽章」：1905年「保正甲長徽章」の研究』（『歴史臺灣』7、2014年）がある。



川村 清志 国立歴史民俗博物館准教授。

札幌大学文化学部教授をへて2012年より現職。学術博士（京都大学人間・環境学研究科、2003年取得）。専攻は文化人類学、日本民俗学。主な著書、論文に『クリスチャン女性の生活史—「琴」が歩んだ日本の近・現代』（青弓社、2011年）、『気仙沼尾形家（大家）の年中行事—尾形栄一日記を中心に—』（川村清志・葉山茂（共編）、国立歴史民俗博物館、2017年）、「移動する身体と故郷の物語の行方—移動によって見いだされた故郷と移動のなかで変容する故郷」（『歴博研究報告』199集、2016年）など。



加藤 謙一 金沢美術工芸大学美術工芸研究所学芸員。

国立民族学博物館にて普及係職員、文化資源研究センター機関研究員、その後長崎歴史文化博物館教育グループ研究員を経て、2012年より現職。教育活動を基盤とした博物館機能の高度化に関する実践的研究をおこなう。主な論文に、「長崎歴史文化博物館の学校との連携事業—協力校・パートナーズプログラムがもたらした変化—」（『長崎歴史文化博物館研究紀要』5 2010年）、「ユニバーシティ・ミュージアム構想からみた金沢美術工芸大学の美術館機能の現状と将来」（『金沢美術工芸大学紀要』60 2016年）、「大学美術館による学内学習支援プログラムの提案」（『研究所報』30 金沢美術工芸大学美術工芸研究所 2017年）がある



小谷 竜介 東北歴史博物館学芸員。

牛久市史編さん室、宮城県教育庁文化財保護課を経て、現職。専門は日本民俗学。主な編著書に『鮭～秋味を待つ人々～』東北歴史博物館（2003）、『波伝谷の民俗』（政岡伸洋、鈴木卓也と共監）東北歴史博物館（2008）、主な論文に「被災地の文化遺産を保護するための試み」日高真吾編『記憶をつなぐ』千里文化財団（2012）、「波が伝わる谷の現在」東北芸術工科大学編『東北学07』（2016）がある。



黄 貞燕 国立台北芸術大学博物館研究所助教授・図書館校史発展組組長、文化部民俗審議委員。

博物館と地域社会、博物館政策、無形文化遺産学に関する研究をおこなう。

主な著書に、「博物館、市民知與新公共領域的形成」（『想的與跳的：博物館中的教與學及其超越』王嵩山編著 国立台湾博物館 2014年）、『日韓無形的文化遺産保護制度』（国立伝統芸術センター 2008年）がある。



武知 邦博 枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館学芸員。

財団法人遺芳文化財団日本はきもの博物館学芸員を経て、2007年より現職。

1999年帝塚山大学大学院人文科学研究科日本伝統文化専攻修士課程修了。専門は民俗学、特に民具学。著書に、「スリッパ」『かわとはきもの No.126』（東京都立皮革技術センター台東支所 平成15年）、「『日本履物新聞』に読む戦後の履物」『日本はきもの博物館・日本郷土玩具博物館 2004年度年報』（平成17年）がある。



段上 達雄 別府大学文学部史学・文化財学科教授。

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員、文化庁文化財保護部伝統文化課文化財調査官を経て、現職。武蔵野美術大学大学院造形研究科修士課程修了。芸術学修士、専門は日本民俗学。とくに日本の祭礼行事の調査研究をおこなう。主な著書、編著に『大分県の不思議事典』新人物往来社（2007）、『神と仏のいる風景』山川出版社（2004）、『ものがたり日本列島に生きた人たち9巻』岩波書店（2001）がある。



伊達 仁美 京都造形芸術大学歴史遺産学科教授。

帝塚山大学教養学部日本文化コース卒業（1983）。公益財団法人元興寺文化財研究所伝世品保存修復室長を経て現職。専門は、民俗文化財の保存修復ならびに活用。主な研究活動は、「「剣鉾」の剣にみるしなり方の構造」「金属配合比から見る「剣鉾」の製作技法の研究―祭礼形態におよぼす影響について―」、「伏見の酒造用具の調査」「京都市左京区久多の山村生活用具の再整備」。マダガスカル、ヨルダンで文化財の保存修復指導をおこなう。



林 承緯 国立台北芸術大学建築与文化資産研究所准教授、文化部民俗審議委員、日本民俗学会国際交流特別委員会委員。

民俗学に関する研究をおこなう。主な著書に、『宗教造型與民俗傳承：日治時期在臺日人的庶民信仰世界』（芸術家出版社 2012 年）、『信仰の開花：日本祭典導覽』（遠足文化 2017 年）がある。



政岡 伸洋 東北学院大学文学部歴史学科教授。

国立済州大学校客員教授、四国学院大学社会学部助教授を経て、現職。民俗学・地域社会の研究をおこなう。主な著書に、『図解雑学こんなに面白い民俗学』（八木透と共編著 ナツメ社 2004 年）、仙台の祭りを考えるための視点と方法』（大崎八幡宮仙台・江戸学実行委員会 2014 年）がある。



末森 薫 関西大学国際文化財・文化研究センター ポストドクトラルフェロー。

東京文化財研究所文化遺産国際協力センター客員研究員、国際協力機構大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト専門家、国立民族学博物館文化資源研究センター機関研究員を経て、2017 年より現職。修士（学術）。博物館における資料保存・管理に関する実証的研究、中国甘肅省にある仏教石窟をフィールドとした考古・美術史および文化財科学の手法を用いた複合的な研究をおこなう。また、エジプトの文化遺産保護に係る国際協力活動に携わる。主な著書に、『麦積山石窟環境与保護調査報告書』（文物出版社、2011 年、共著）、「敦煌莫高窟早期窟千仏図の規則的描写法—第二五四窟の空間設計における千仏図の機能—」（『佛教藝術』347 号 毎日新聞出版、2016 年）がある。



寺村 裕史 国立民族学博物館人類文明誌研究部助教。

総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員、国際日本文化研究センター・機関研究員、同・文化資料研究企画室・特任准教授などを経て、2015 年 4 月より現職。博士（文学）。専門は情報考古学／文化情報学。

日本（主に古墳時代）、ウズベキスタン、インドやイランなどをフィールドに、文化資源のデジタル化・情報化に関する研究や、GIS（地理情報システム）を援用した歴史文化研究を主なテーマにしている。

主な著書、論文として、『景観考古学の方法と実践』（同成社 2014 年）、「古墳築造場所の選択と眺望分析」宇野隆夫編著『実践 考古学 GIS —先端技術で歴史空間を読む—』（NTT 出版 2006 年）などがある。



